

自然と人、人と人の和解を

「自然から遊離するバベルの塔は倒れる。人も自然の一部である。それは人間内部にもあって生命の営みを律する厳然たる摂理であり、恵みである。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人の和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう。それがまっとうな文明だと信じている」

—中村 哲（『天、共に在り』より）

中村哲医師が歩んだ道を私たちも歩む

2019年度現地事業報告

PMS（ピース・ジャパン・メディカルサービス）総院長／ペシャワール会会長

村上優

二〇一九年十二月四日、中村哲先生が何者かの凶弾に倒れ、ドライバーのザイヌッラーさんと護衛四名の方々も共に亡くなりました。「中村先生のいない現地事業報告はない」と強く思います。先生の志を胸に、アフガニスタン現地のPMS、多くのアフガン国民、それを支えるペシャワール会の二万人を超える会員や支援者、さらにはこの事件を機に中村先生の存在を知った国内外の多くの人々に支えられて、「中村先生の事業は全て継続し、希望は引き継ぐ」を合言葉に今日まで来ました。

前年度の報告の末尾に中村先生は次のように述べられています。「現地赴任から三五年が経ち、いまだに事業が進められていることに不思議な気がします。（中略）医療から始まり、大干ばつで灌漑・農業に力を注ぎ、そして今、温暖化による沙漠化と対峙して河川からの取水技術に集中しています。しかし追いかけ続けてきたものは変わりま

せん」と。では、先生は何を追いかけ続けておられたのでしょうか。

当初から「一隅を照らす」と表現されていましたが、難病や貧困にあえぐ人々の場に居続けて光を灯し、人々の命と生活を支援してこられました。「目の前に困った人がいれば手を差し伸べる。それは普通のことです」という行動力と思索は、私たちにとって揺るぎない羅針盤です。

中村先生が一九八四年の現地赴任から追いかけて続けたもの、その道を私達も歩みます。

2019年度の概要

新型コロナウイルスとPMS

中村先生が亡くなった昨年十二月初め、新型コロナウイルスが世界に広がり始めました。PMSの再出発も新型コロナウイルス拡大の影響を強く受けてきました。今年一月



マルワリード取水門に立つ中村医師と村上医師（2004年4月19日）

二五日のお別れの会は五千人を超える人々に集まっていたきました。この頃、新型コロナウイルスが中国では猖獗をきわめ、日本でも感染が始まって不安が広がってきました。現地PMSと日本のPMS支援室が事件後インドのデリーで初めて会合した二月一〇日から一五日を境に、インドも日本からの渡航禁止措置を取りました。三月からの日本はご存知の通りです。アフガニスタンもイランとパキスタンを経て感染が広がり、公式の数字以上に感染が広がって、カブールやジャララバードでは都市封鎖されました。

日本でもアフガニスタンでも活動は大きく制約を受けましたが、中村先生の築かれた事業は止まることなく現場の作業は継続していました。コロナウイルスの感染の一波は過ぎても二波が必ずきます。しかし、これまで行なってきたように、その地域での状況を注意深く判断して、ルールを守り完全に配慮して事業の前進を図ることにつきます。

「安定灌漑」の重要性の認識

アフガニスタンでは一六年から三年連続して少雨が重なり、全土が更なる渇水と干ばつに見舞われ、大量の国内難民が発生し、灌漑への関心が高まった。クナール河でのPMSの実績が大きく評価され、ガニ大統領がPMS灌漑方式を称賛した。これまでに戦火に明け暮れ干ばつを無視してきたが、人々の安定した生活、平和への動きが活発化していることも関連する。

PMS方式で心掛けたこととして中村先生は以下を挙げています。(1)なるべく単純な機器で対処できること、(2)多大なコストをかけないこと、(3)ある程度の知識があれば地域の誰でも施工できること、(4)手近な素材を使い、地域にないものをできるだけ持ち込まないこと、(5)壊れても地域の人で修復できること、(6)水はごまかせない、水のように正直であること。

地球温暖化は急速に、容赦なく、大干ばつだけでなく、時に大規模な洪水も引き起こし、荒々しい気候変動となって現れる。すでに起きている地球温暖化による危険を背負って、「安定灌漑」を全域に普及すべき時期に来ている。

年度事業のあらまし

第一期工事をJICA（国際協力機構）共同事業として始めたマルワリードII堰建設は、後半の第二期をペシャワール会独自の事業として年内の完工を目指して進められている。下流域では住民による耕地回復、新開地が急速に拡がり、小麦やスイカなどの初収穫が行われている。

FAO（国連食糧農業機関）との関連事業のミライン訓練所が軌道に乗り、昨年は二四〇名が研修を受けた。マルワリードII堰の建設現場はカマ堰と共に、生きた教材として研修生たちに希望をもたらした。干ばつが進行するなか、PMSの灌漑事業では取水技術が確立し、普及事業に向け大きな歩みとなった。現行及び今後の堰の建設計画そのものが普及事業ともなる。

1. 医療事業

今年三月以降、行政から新型コロナウイルス対策で勤務体制について丁寧で細やかな通達があり、灌漑、農業事業に携わる職員が

表1 2019年度 診療数及び検査件数

国名	アフガニスタン
地域名	ナンガラハル州
施設名	ダラエヌール診療所
外来患者総数	41,837
【内訳】 一般	32,593
ハンセン病	0
てんかん	914
結核	179
マラリア	4,113
外傷治療総数	4,038
入院患者総数	—
検査総数	10,364
【内訳】 血液一般	1,409
尿	1,517
便	2,173
ハンセン病塗抹検査	0
抗酸性桿菌	169
マラリア	4,085
リーシュマニア	565
その他	446

自宅待機を要請されるなか、医療事業は通常通りであった。地域で重きをなしてきたダラエヌール診療所では、診療を待つ時間を利用して男女それぞれの待合室で手洗い指導やマスク着用、咳をする時の指導等が根気強く行われている。二〇一九年度の診療内容は表1の通り。

2. 灌漑事業

主な工事は以下の通り。

1. カチャラ堰流域(マルワリードII)・第二期工事

本地域はミラーン堰対岸の上流にあり、四年間の工期で二〇一六年十月に着工し今冬の竣工予定で進められている。着工後の急速な治安悪化による工事の一時中断が危惧され、またパキスタンからの大量帰還難民の早期帰農を促すため、流域への早期送水を目指した。二〇一八年夏には目的の四

カ村へくまなく水を送れるようになり農地が拡大していった。以降、排水路の整備(排水路1||二七三六mが終了し、現在、排水路4||全長三五〇〇mを建設中)、護岸工事、交通路の整備、植樹が続けられている。排水路整備により給水と排水を分離した事で湿地帯が農地に回復しつつあり、今年度カチャラ村では第4分水門が建設された。また、川沿いに長く広がるカチャラ堰流域では洪水対策||護岸工事が重要で、基礎工事は護岸線の最終地点まで到達している。同地では耕作地が急速に拡大し、主幹水路から接続している既存の水路の整備が必要となり、現在、ベラ用水路の延長工事に取り組んでいる。

2. マルワリード堰改修計画

本計画は以下の通り。

①取水門の拡張と堰の改修(コンクリート製

土砂吐きの設置)

②取水口からブディアライまでの約一三kmの用水路床面ライニング(覆工)の
③洪水の通過部(涸れ川)の改修

④用水路土手のかさ上げ他

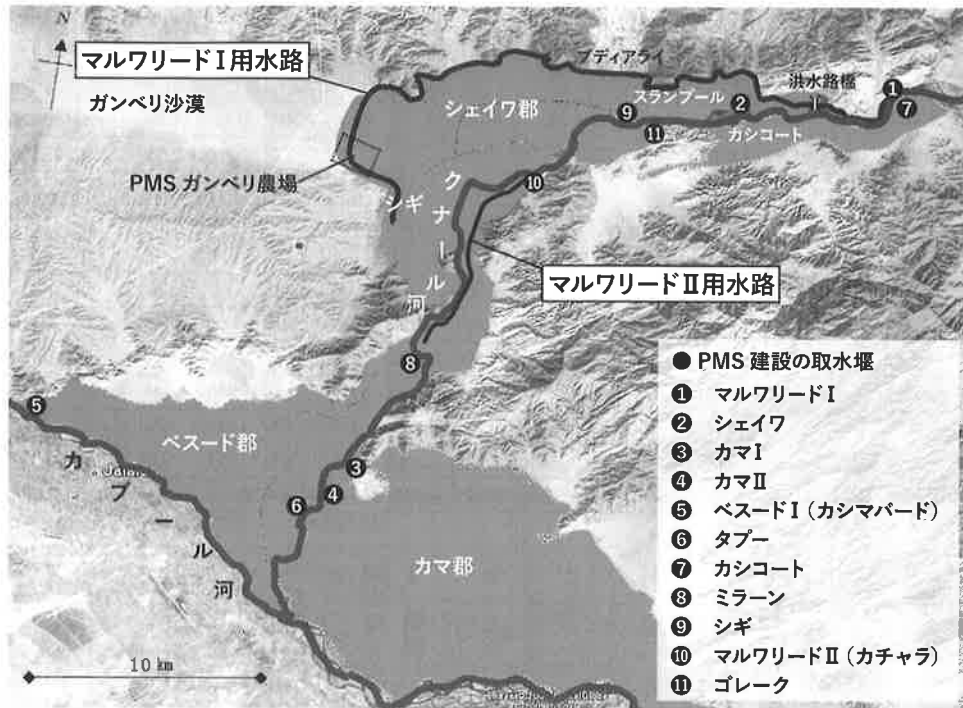
二〇一九年末に着工予定だった取水門の拡張と堰の改修は、中村哲医師の逝去を受け今冬へ延期された。②の用



新型コロナウイルスの影響で物価が高騰する中、PMS職員が健康で働けることを第一と考え、PMS農場で今年収穫された小麦と蜂蜜は職員に配給された(2020年6月10日)

水路床のライニングは取水口から一・五kmまで終了している。

また、③の洪水の通過部(マルワリード用水路を横切る洪水路)の改修工事が行われた。バルカンレイ村を通過する用水路E区(三・四km地点)の洪水路では、幅一五mの橋を三〇m以上に拡張する計画だった。しかし両岸の住民からの土地収用が困難であったため、橋の両端を一・五mずつ拡張し一八m幅となった。ジャリババ溪谷からの洪水通過路は用水路七〇〇m地点にあり、二〇一一年に一四mから三六mへ拡張され良く



機能している。今回はその周辺の整備が行われた。

3. **ガンベリ排水路網の完成(シギ分岐)**
ガンベリ開拓は湿地処理が必須であり排

水路網の完備が急がれた。主幹排水路工事(二・七km)は二〇一七年に既に完工しており、残るガンベリ下流域に約一・九kmの排水路(シギ分岐)が二〇一九年に着工された。周辺村との調整に時間がかかって本格的な着工が遅れ、更に現場は砂丘が連続し見通しがきかない土地で、かつ著しい軟弱地盤が多い難工事だったが、予定通り昨年十一月に完成した。これでマルワリード用水路の全流域の給水・排水が完全に分離され、湿地や湿害地からの回復、耕地化が期待される。

4. カマ堰改修

二〇一九年二月に完了したカマ第一堰では昨年七月の洪水で右岸の浸食、激流が下る対岸ベスード側からの交通路(橋)と砂州先端部が連続する場所の洗掘が発生した。今後五年間はカマ住民と補修をしていく。

5. 灌漑事業の「普及計画」

ミラーン堰の施設を中心に二〇一八年からアフガン東部の農民指導層、政府関

係技術者を中心に進められ、二〇一九年はタハール、バグラン州など各州からの研修生が参加し、現場での実地訓練を含む研修が開始された。素掘りかコンクリート・ライニングしか習わなかった技官たちは、PMSの「用水路の構造と作り方」を実際に現場で体験実習し、好評であった。

3. 農業事業・ガンベリ沙漠開拓

1. PMSガンベリ農場

二〇〇九年、用水路の最終地点のガンベリ沙漠に横断水路を開通し、同時に沙漠に農場を拓き、PMSの自給態勢を整えた。一六年二月、アフガン政府と協約、開墾地二三五haをPMS農地として半永久的に借用する契約が成立。契約は二〇年毎に更新され、PMSの活動が続く限り継続される。排水路が整った現在、安心して開墾が進められている。

主食の小麦や水稻栽培をはじめ、サトウキビ、旬の野菜など多種の栽培が試みられている。今年は例年になく長雨で小麦に「さび病」が発生し昨年より収穫量が減少した。

二〇一九年度の最大の試みは、養蜂事業で、四月二四日にガンベリ農場で養蜂所開設式が行われた。質の良い蜂蜜三〇〇kgの初収穫があり、今後の増産を見こして巣箱を更に増やした。今年はビエラ二千本からの集蜜も期待され、将来の主要な出荷品目に加えられる。

表2 植樹総数(2003年3月から2020年3月まで)

種類	場所	2003~07年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年(～3月)	合計
ヤナギ	用水路の兩岸、河川工事	116,050	55,380	97,380	60,750	73,315	23,650	37,073	18,400	39,650	14,700	30,250	51,750	61,780	19,850	699,978
クワ	用水路土手	7,000	2,750	8,578	4,430	140	292	0	0	0	0	0	0	0	0	23,190
オリーブ	用水路土手、オリーブ園	2,000	0	840	0	0	0	1,424	1,275	240	136	0	5	0	0	5,920
ユーカリ	砂防林、護岸樹林帯	2,500	1,000	11,478	39,584	22,350	28,196	7,150	7,500	2,611	500	4,659	2,010	2,610	6,905	139,053
ピエラ	ガンベリ沙漠	0	300	600	1,165	165	2,083	175	75	0	0	0	0	0	0	4,563
ガズ	砂防林	0	15,100	71,300	14,356	9,887	22,317	3,573	780	265	0	0	0	2,000	0	139,578
シーヤム	護岸樹林帯	0	0	0	0	0	0	4,614	1,400	2,000	6,270	516	660	2,350	6,000	23,810
ポプラ	ガンベリ沙漠	0	0	0	4,900	10,786	1,850	0	220	0	0	0	0	0	0	17,756
イトスギ	モスク、学校、公園	0	0	0	60	195	300	0	0	0	110	0	200	130	193	1,188
果樹	ガンベリ果樹園	600	0	0	193	0	6,034	5,283	9,185	1,458	1,822	4,348	4,884	509	405	34,721
その他		0	0	0	132	190	412	144	50	26	0	1096	597	337	128	3,112
		128,150	74,530	190,176	125,570	117,028	85,134	59,436	38,885	46,250	23,538	40,869	60,106	69,716	33,481	1,092,869

また、移植後二～五年を経た柑橘類二万五千本の手入れに力を注ぎ、農業事業の責任者が日本で剪定法を実地研修した。オレンジやリンブー(小ぶりのレモン)が数年前から出荷できるようになった。

2. 畜産

二〇一四年に子牛三頭、乳牛二頭から始まった畜産は、現在四七頭になった。毎日原乳を一〇〇～一二五kg供給している。農場では飼育場も広く牧草地も確保されている。

3. 植樹

一九年一月から十二月の植樹数は六万九七一六本。二〇年三月までの累計で、二〇〇三年以来の総植樹数は一〇九万二八六九本となった。用水路や護岸工事に使われる柳ユーカリ、シーヤムの植樹が圧倒的に多いが、他には柑橘類、イチジクなどが植えられている。内訳は表2の通り。

農業事業では、PMSの農業経営に向けて穀類、果樹、養蜂、畜産が主力となり、自活の道につながる事が期待されている。

4. 現地との交流・その他

邦人の渡航が難しい状態が続いている。二〇一七年からジア副院長一行を日本へ迎え交流の機会を持つようになり、一八年に引き続き九月にジア副院長、ディタール技師、ファヒーム技師、アジュマル農業技師が来日し交流を深めた。



新ペラ用水路延長工事。気温が40度を超える中、50人ほどの作業員が懸命に働いている(2020年7月2日)

ファヒーム技師は測量や作図研修も兼ねての来日であり、引き続きテクノ社の方から指導を頂いた。アジュマル技師は徳永哲也氏(山田堰土地改良区前理事長)の尽力と福岡県農業試験場の協力で、柑橘類の剪定方法を学び、今年はガンベリ農場で剪定にとり組んだ。また、来日した職員全員が朝倉市の藤井養蜂場で二年目の講習を受ける事が出来た。

表3 堰の建設及び改修の経過と予定

堰の名称	(場所)	用水路長(km)	'03~'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	施工・実施期間		維持管理期間	
														2020年度砂吐設置予定	堰造成	堰造成	堰造成
マルワリード堰	クナール州ジャリババ	27	2020年度砂吐設置予定	堰造成					沈砂池改修	主幹排水路建設	取水門改修	再ライニング約1.5km	排水路シギ分岐	堰改修			
シェイワ堰	シェイワ郡カンレイ村	0.5	河道変遷	堰造成													
カマ第一堰	カマ郡・上流域	0.35	安定	堰造成								堰改修	堰修復、対岸護岸一部補修				
カマ第二堰	カマ郡・下流域	1.05	安定	堰造成						堰改修							
カシマバード堰	ベスード郡カシマバード村	0.25	安定		堰造成												
タブー堰	ベスード郡タブー	0.7			堰造成					廃止、ミラーン堰に統合							
カシコート堰	シェイワ郡カシコート村	2.5	マルワリードと連続			堰造成							上流既存堰、護岸一部補修	堰改修予定			
ミラーン堰	ベスード郡ミラーン村	0.3	750m上流で河道整備				堰造成						護岸一部補修				
シギ堰	シェイワ郡シギ村	0.35	河道変遷				堰造成										改修予定
カチャラ堰	シェイワ郡カチャラ村	5.5	安定						堰造成	全域送水	排水路網と植樹、護岸造成						完工予定
ゴレーク堰	シェイワ郡ゴレーク村		21年度建設予定										測量				測量、堰建設予定
ミラーン訓練所 (FAO 共同事業)										訓練所建設	PMS方式訓練	訓練・候補地調査	候補地調査				
JICA 共同事業				カマ郡・カシマバード堰 べスード護岸	カシコート堰	ミラーン堰	カチャラ堰				共同調査・ガイドライン作成						

※2019年度から4年間のマルワリード堰改修計画は工事を延期、2020年度から再開。
 ※シギ、シェイワ堰については河道移動を観察、将来必要ならマルワリード堰流域に統合。
 ※カチャラ堰(マルワリードII)は2016年10月から2018年9月までJICA共同事業。2018年10月からベシャワール会単独資金による事業。
 ※ミラーン付近河道整備:ミラーン堰河道の流れを安定させるため、河道固定堰の建設を検討。

十二月四日の中村哲医師の訃報を受け、ジア副院長とディダール技師の二名は先生のご遺体につき添い来日。その前にPMSの各事業の主なメンバー二名が意志を確認しあい、皆が一致し運営委員会(現ドクター・ナカムラコミッティ)を結成していた。今年二月にドクター・ナカムラコミッティからビザ取得が間に合ったメンバー八名と、中村医師の後を引き継いだ新PMS総院長村上優およびPMS支援室メンバーがインドで今後の事業について協議した。これまで日本側へ現地の実情を伝えていた中村医師亡きあと、更に現地との交流が求められる。

◎その他

四月、今年初めての洪水が発生した。直前の二、三月にPMSが造った護岸線は石出し水制一つ一つの確認を促し

ていた。これまで中村医師が現場の技師や運転手と常時行なってきたことで、数カ所補強の必要があったが、洪水前に終えることができた。

また、コロナウイルス感染対策で自宅待機命令のさなか、マルワリード用水路FG地区で用水路床面が陥没。見廻り体制が行き届いており発見者からジャララバード事務所へ連絡、技師の派遣、重機や燃料の手配と驚くほどスムーズに修復工事が進められた。ジャララバード市内の事務所から現場への道路は封鎖されている中で、職員たちによる粘り強い行政への事業進行の申請と資機材の輸送の工夫により難局を乗り切った。皆が一致して前に進むとする姿勢が伝わってきた。

2020年度の計画

二〇一九年度の連続である(表3)。

①カチャラ堰流域は、護岸八・五kmの建設を八・九kmに延長、排水路の整備を続行、ベラ用水路延長工事、②マルワリード用水路は取水堰と取水門の改修、用水路床面の再ライニング、③ゴレーク地区及びシギ堰周辺の調査が予定されている。取水設備の普及のための研修は、PMSの体制が整うのを待ち、現在JICAとの共同事業であるガイドライン完成後に、実地研修が再開される予定である。ラグマン州の灌漑計画は



今年も田植えの時期が来た。ここがかつて死の谷と呼ばれた沙漠だったとは……
(2020年7月7日)

カブール河の汚染が酷い^{ひど}ため中止となった。二〇一七年に打ち出された二〇年継続態勢は、既設のPMS水利施設の維持、隣接地域へのPMS取水方式の普及が目的であり、将来を見据え、今年採用した若年層の技師二名の訓練を続行し長期に備える。ガンベリ農場では、養蜂、畜産事業が拡

充される予定であり人材の育成が必要となる。引き続き細野道明氏（CTII）の指導を頂き栽培計画の見直し等を進める。

医療事業は、ガラエヌール一帯のみならず重きをなしており、設備拡充の必要性が出てきている。他事業と同様に人材育成が今後の重要な課題である。

2019年度を振り返って

以下は中村哲医師が昨年度のまとめとして書いた文章である。すでにこの時に自身の赴任時から現事業までの経緯を簡素にまとめ、三五年間を振り返っておられる。ここに再度掲載し、共に振り返ってみたい

無事に一年が過ぎました。現地赴任から三五年が経ち、いまだに事業が進められていることに不思議な気がしています。

正確には一九八四年ペシャワール赴任、八八年のソ連軍撤退開始と同時にアフガン東部の山岳地帯へ活動を広げ、二〇〇〇年の大干ばつに遭遇、その惨状に医療の無力を骨身に覚え、診療所周辺の村落救済に奔走、飲料水確保で井戸の掘削、次いで灌漑による農業復興、大河クナルからの取水、暴れ川と対峙するうちに年月が経ち、気づいたらお爺さん——という訳です。この間、二〇〇一年にアフガン空爆、米軍の進駐、

そして撤退開始、振り返れば慌ただしいことです。

日本でもバブルとやらが膨らんで消え、失われた二〇年などと言ひ、右往左往するうちに昭和→平成→令和と時代がかわり、慌ただしくなりました。しかし、通信・交通の便だけ、悪いことも沢山、速やかに起きるようになりました。

現地事業はまるでこのような世相を無視するようになり、続けられています。医療から始まり、大干ばつで灌漑・農業に力を注ぎ、そして今、温暖化による沙漠化と対峙して河川からの取水技術に集中しています。しかし、追いかけて続けてきたものは変わりません。むしろ、ここでは必然の成り行きだったと思われず。

更に竿頭^{かんとう}一步を進め、この事業の恩恵を拡大すると共に、私たちの軌跡が人々を励まし、神意に適うものである事を祈ります。併せて、これまでの温かいご関心とご協力に感謝致します。

中村 哲

中村先生に代わって現地事業を振り返る役割を果たそうとすればするほど、あまりにも失った人の大きさに圧倒される。状況を見る炯眼^{けんがん}、この地域から世界を見る思想、判断し展開する実行力、そしてそれを伝える言葉の力。皆さま、PMSの事業とそれを支援する活動に力をお与えください。